

# 萬葉期以前の國語研究に關する卑見

上田 萬年

今般萬葉集講座が出版せられるやうになつて言語篇が新進諸家によつて執筆せられるやうになり、その目次がすでに發表せられて居る。然るところ私にも何か話せといふことであるので、平素考へてゐたところをいさゝかのべてみたいと思ふ。勿論私は最近眼を患つて、各種の文獻を引用することが甚だ困難である故に、かういふ側の引用は茲には略すことゝして、たゞ卑見だけを述べて讀者の批判を仰ぐことゝする。

一體、萬葉集は奈良朝に出來たものであつて、奈良朝といふのは西洋紀元でいふと八世紀にあたるのである。古事記日本紀の如きもやはり奈良朝で編纂されたものであるからこれと同時に著書だといふことがいへる。吾らが日本國語に關する最古の文獻としては先づこれらの書物を主とするのであるが、然し、これらは日本語を漢文字にかき表すといふ上に於ての最古のものであつて、日本語それ自身はこれよりもはるかに古く存在したといふことは否みがたし事實であらう。神武天皇の御即位を紀元元年として勘定すれば少くも千三四百年の後の時代にあたるものである。昭和の今日の御世から奈良朝に遡るほどの時間があるのである。或は今から奈良朝までよりももつと多い年

月がその間にあるといつてもよからうと思ふ。この間は即ち日本語が口で語り傳へられたといふ時代に屬するので、文字でその寫眞をとられるといふことはなかつたといつていゝ。この千三四百年の不文時代に、言語が全く變遷なしに進んだといふことは、今日の吾々には考へられないところである。無論國學者にはすれば、上世は極めて質樸の御世であつて交通などが頻繁でないので言語は比較的簡單に語りつたへられた、又朝廷の事蹟や神祇に關することは語部といふものがあつて正實にそれを語り傳へた、それであるから神代からの言語は大體古事記日本紀萬葉集あたりの言語と大差がないものであると主張するのである。それにしても語り傳へてゆく上に文字といふやうな利器がなかつた時代であるから、變遷のあるべきは想像してよからうと思ふ。斯様な次第で私共の意見からすると、古事記日本紀萬葉集等にのこつてゐる言語を有史的の言葉とみて、それ以前の言葉を不文的の言語といふやうに見、この不文的の言語について色々研究してみることが必要であらうと考へる。これは今日までの國學者仲間によつては試みられなかつた企であるが、明治以後の言語學者によつては色々な企がされたのである。例へば、田口卯吉博士は印度語と日本語の關係について論文を發表され、松村任藏博士は支那語と日本語の關係について、又西洋人では英國のアストン氏は朝鮮語と日本語の關係について、同じく英人チャンバレン氏はアイヌ語及琉球語と日本語の關係について、最近には松岡、波岡等の諸氏が日本語と南洋語との關係について新意見を發表された。その他日本語とベルシヤ語、日本語とイスラエル語、日本語とギリシヤ語などといふやうな方面についても研究を發表された人があるやうに記憶する。斯様に明治年間以後になつては日本語の上代の有様について、世界各國語と比較研究をする機運が大いに表れてきた。かういふ研究は、日本の古典の知識を以て研究をしなければならぬものであるが、今日までの學界の有様から

いふと、まだ充分組織的の比較研究にはなつてゐないと思ふ。これは今日以後に於て、日本の言語學界の發達と共に新進の學者諸君の研究に期待する外ないのである。

私は今さういふ大きな問題について比較研究して見ようといふやうな考は持つてゐない。けれども日本語の歴史をしらべてゆく場合に、萬葉以前の言葉といふものについて今までに考へついたことを茲にお話して、萬葉研究の諸氏の御參考に供したいと思ふのである。

一體、日本では五十音圖といふものが出來て、その五十音圖を基礎として國語研究に入ることが一般の順序と考へられてゐるやうであるが、私はこの五十音圖といふものについて少し異つた見解を持つのである。五十音圖を以て日本語を組織する音韻のすべての如きものであるかに考へる學者がある。徳川氏時代の國學者は殆んどすべてさういふ信仰のもとにゐるやうであるが、これは私は少し考へるものではないかと思ふ。例へば五十音圖の上には濁音がない、拗音がない、促音がない、シの假名もない。日本の古語はかういふ五十音の假名の代表するものだけであつて、その外のもが日本の古語になかつたといふことは果して正確な説であらうか。私はまづこの點で一つの疑問を持つのである。奈良朝以前の日本語には濁音もあり拗音もあり、促音もあつたのではないかといふ考を持つて居る。又シの音も長母音も二重音もあつたのではないかと思ふのである。そのことを少し述べてみたいと思ふ。

例へば奈良朝から平安朝に於てもサといふ假名がある。そのサといふ假名は同時にザとよんだこともある。又シヤとよんだこともある。者とといふ字をかいてサともよみ、シヤともよむ。者とといふ字はシヤといふ字音である。これは古くはシヤと訓んだのであると考へられる。魚のシヤケ、サケなども兩方によんでゐるが或はシヤケといふ方が古い

のではないかと思ふ。かういふやうに假名を發音外の濁音や拗音によむことが古くからあつたのを、假名でかくときはそれを一つのサといふ字に攝してしまつたのだと思ふ。又長音の場合でも同様のことが云へるのである。

今日でも五畿内地方では、ハとかメとかはハーとかメーとかいふやうに發音してゐる。これも長母音をかきあらはす方法がないために單母音でかいたと説明する事も出来ないであらうか。又二重母音では、*ui*といふやうな二重母音が古くあつたのではないかと思ふ。例へば神といふ言葉でもカムイといふ形が古いので、カムイといふ形から一方にカムといふ語が出、一方にカミといふ言葉が出てきたのではないか。つまりアクセントの關係から音が分化するので、今日の鹿兒島の方言で、寒い・眠いをサミ・ムミと發音するやうに、イカムかにアクセントのある場合によつて二つにわかれるのである。又、ウがヲにかはつたり、ヌがノにかはつたりする。かういふことを考へると二重母音も上代にはあつたやうに思はれるのである。字音假名遣でいへば、貴といふ字をクヰと書くのであるが、このクヰといふのも支那の音では二重母音の *ui* である。花といふ字をクワとかく、これも支那ではホア *Hoa* である。斯の如く二重母音であるのが支那の本語であることを、日本の假名で書くときはワ行の假名を加へたのではないか。かういふ例はこの外にも多いやうに思はれるのである。

又、子音の上でいへば、ガとガといふ音は昔から兩方あつたもので、それが假名であらはずときはガといふやうに一つであるが、實際には *g* と *ng* といふ音が昔からありはしないか。例へば、ワガ大君ワゴ大君といふ語は、これは一方のてにはのノとかナとかいふ語と同一性質ものであつて、古くはナとノ、ガとゴといふものは兩方併立して使はれたといへるやうである。これも發音上のちがひであつて、それが鼻音的に強くなるときはナ行となり、普通るときは

喉音的のガ行になるのである。而して、鼻音と喉音の間のものがng音になる。シの字は平安朝に到つてはじめてつくり出された文字であるが萬葉時代にもすでにこの音があつたやうに思はれる。例へば萬葉集で手名とかいてテナと訓せてゐるが、これは萬葉集をよむ場合の口傳とされてきたものである。それはシの假名のない時代に萬葉をかいた人がンを附け加へてよむやうにしたことが想像せられる。

例へばハ行の假名でも、今日はハヒフへホとよむが古くはバビブベボとよんだらしいのである。このことについては、拙著「國語のため」に詳しく論じておいたからそれについて参照せられたい。不文時代の日本語は今日のハヒフへホを持たないのであつた。今日の日本人は語のかしらをハヒフへホと發音して中はワキウエナに發音するやうである。奈良平安のはじめ頃にはハヒフへホに發音してゐたからこれからかはつてゐるので、ワキウエナと發音するのは平安朝以後のことであるやうだ。かういふやうにハヒフへホの假名であらしてゐる音の側の變遷は、P・F・Wの三つの音がこの一つの行によつてあらはされてゐるのである。これは方言研究からも或は漢語や悉曇語の比較研究からも容易に證明出来ることである。現代の人がこの説をきくと奇異な感をもつかもしらぬが、奈良朝から現代までの音の變遷を考へてみて奈良朝以前の音の有様を想像しやうとする場合に、この推斷は決して無理なことではないのである。

以上述べたやうな考はずべて一つの提案にすぎない。然し凡そ學術研究の上では吾々はこの提案を輕んじてはならぬのである。これについて十分研究してこれがやがて一般に認められるとき公説となるのである。かういふ方面に向つて新進の學生諸君が十分に努力していただきたいと考へる。

次に述べてみたいと思ふのは日本語の語根の研究である。日本語といふものは一體單節的のものか、二節的のものか、若くは多節的のものか、かういふ問題もまだ、はつきりと研究されてゐるといはれない。名詞・形容詞・動詞などの組織構造についてはこれまでも一通りの研究がなされてゐるけれども、てにはなどは一體どういふ起源のものであるか、歐洲などではこの方面のことは明かになつてゐるが、吾國ではまだく不十分としかいへない。感投詞から派生したといふてゐる學者もあるやうであるが承服することは出来ない。ヲといふてには、へといふてには、或はヨリといふてにはの如き何れも一部の説明は存するけれども、てには全體が總括的に如何なる起源で出來たかといふことは明でない。ガとかノとかいふものに到つてはまだ提案すらないやうである。この方面も今後大いに研究されて然るべきものであると考へるのである。

又、次には動詞・形容詞の活用起源如何といふことになる。たゞつかひざまの研究だけで、それがどういふ言語の變遷を経てきたかといふことは不明のまゝのこされてゐるのである。日本語は四段活用であるものが多い。けれどもその外の一段二段變格の活用は如何にして發達してきたかも十分に説明されてはいない。これは外國語との比較研究でなくても日本語だけの上からも十分に説明出來るやうに考へられる。又萬葉集以後の時代に於て吾々が普通みとめる動詞・形容詞、更にかゝりむすびの原則なども如何にしてそれが生じたのであるか、無論簡單に言語上の習慣に基いたといへないこともないが、さういつてしまふまでにその以前の心理的經過はどうであるかといふ説明も未だ出來てゐないのである。

かういふ問題は今日以後の國語學界の解釋すべき問題でなければならぬ。これをするには文學的の言語の性質を研

究することも貴重なことであるが、文學的でない言語、例へば方言とか、周圍の異民族の言語の比較研究が必要になつてくる。かういふ立場を築いてゆく上に萬葉にのこれる言語の法則——音韻・語法は貴重な材料である。歌學の變遷をみる上にも萬葉集は大切な文獻であるが言語の比較研究をする上に於て大なる價值がある。かういふ意味で言語篇を研究される人々が日本の言語學或は東洋の言語學といふものに向つて光輝ある研究を發表されることを切に希望する次第である。

昭和八年六月五日印刷  
昭和八年六月十日發行

萬葉集講座 第三卷

言語研究篇(奥附)

〔非賣品〕

編輯者

東京市日本橋區通三丁目八番地  
和田利彦

印刷者

東京市本郷區眞砂町三十六番地  
龜谷良一

印刷所

東京市本郷區眞砂町三十六番地  
日東印刷株式會社

發行所

東京市日本橋區通三丁目八番地

春陽堂

電話 日本橋五一・六四一・三七八八  
振替口座 東京 一六一七番